慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近代江南地域史研究の成果と課題：小田[朱小田]氏の江南郷鎮社会史研究によせて
Sub Title	An evaluation of local studies of the lower Yangzi delta in modern China
Author	佐藤, 仁史(Sato, Yoshifumi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2000
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.69, No.3/4 (2000. 5) ,p.283(615)- 302(634)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20000500-0283

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

近代江南地域史研究の成果と課題

——小田〔朱小田〕氏の江南郷鎮社会史研究によせて——

佐藤仁史

一

一九七八年一二月における中国共産党中央委員会総会（一一期三中全会）での農業経済政策の大転換により、中国の学術界において市鎮や市鎮ネットワークの歴史は中国農村の内発的発展を示すものとして再評価されるようになった。特に農村政策において「蘇南モデル」として推奨されたように、江南の市鎮は独自の〝発展〟の「モデル地域」と見なされるに至った。そして、〝発展〟に対する見方が変化したことにより、江南市鎮の実態と発展への歴史的位置づけが一九八〇年代以降の研究の主要な関心となり、歴史学においては市鎮の経済機能を中心に多くの実証研究が生み出された。なかでも、現地の郷鎮志を駆使して精緻な実証を積み重ねた樊樹志『明清江南市鎮探微』（上海、復旦大学出版社、一九九〇年）、陳学文『明清時期杭嘉湖市鎮史研究』（北京、群言出版社、一九九三年）、など特に明清期を中心として重厚な研究が輩出された。[1] またこれらに先立って、比較的早くからの江南市鎮の実証的研究の成果をまとめた劉石吉『明清時代江南市鎮研究』（北京、中国社会科学出版社、一九八七年）が中国で出版されたことも、江南市鎮に対する関心の高さを示したものといえよう。

他方、日本の学界に目を向ければ、近年の最大の成果は一九八〇年代末より歴史研究者が現地の研究者と連携して江南市鎮の実地調査を実施し、その一部が刊行されたことである。南京大学との共同研究を行った名古屋大学は、森正夫編『江南デルタ市鎮研究』として、復旦大学との共同調査を進めた大阪大学は、濱島敦俊・片山

剛・高橋正『華中・南デルタ農村実地調査報告書』（『大阪大学文学部紀要』第三四巻別刷、一九九四年）としてそれぞれの成果を世に問うた。これらの実地調査の特徴は、第一に、従来発展段階論に依拠して文献による実証研究を進めてきた研究者が、広い意味での生産の場としての地域社会を総体的に把握することに努めるという方法論を採ったこと、それによって第二に、文献史料のみでは把握が極めて困難であった市鎮や農村社会の多様な側面について聴き取り調査などを活用することで遡及的な理解を深めていこうと意図したことにある。(2)

ところで、右のように江南市鎮の研究は、明清期を中心とする実証研究と現代の実地調査とにおいて研究の深化が見られるのに対し、それとは対照的に清末以降から民国期にかけての状況においては空白が見られる。いわば「バイブル」的存在である費孝通氏のものを別にするとすれば、いずれのアプローチによっても付随的な言及を越えるものではない。これは、明清期の実証研究が依拠した郷鎮志には、民国期に出版されたものが相対的に少ないこと、聴き取り調査によって遡及できるのがせいぜい一九三〇年代までといった限界があることなどによる。このような状況下にあって様々な現地史料を発掘し、近代江南郷鎮社会の経済、政治、民俗の変容を多面的に検討することで、研究史上の空白を埋めようと試みたのが小田（筆名。本名は朱小田）氏の『江南郷鎮社会的近代転型』（北京、中国商業出版社、一九九七年）である。(3)本書は氏が一九九五年に蘇州大学に提出した博士論文をもとに執筆され、段本洛氏が主編を務める江南現代化研究叢書の一冊として刊行されたものである。それは、蘇北の農村部出身であり、中国の農村が抱える多くの問題点を自らの体験を通して熟知している小田氏の農村近代化に対する鮮明な問題意識に支えられているばかりでなく、隣接分野の方法論の導入や従来十分に検討されなかった領域の考察、在地社会に関する種々の原史料の開拓などがなされており、空白が多い近代における江南郷鎮社会研究の一つの到達点を示すものである。そこで、本稿では近代江南地域史研究における最近の成果として小田氏の研究を紹介し、この分野においてどのような課題が存在するかを、主に筆者の問題関心である清末・民国期における郷鎮社会の有力者層の動向に即して検討していく。

二

まず小田氏の研究の概要を見てみよう。第一章の「導論」では、先行の「社区研究」[4]を総括し、一九八〇年代以降、費孝通氏らによって再び喚起された、市鎮と農村の工業化が有する内発的発展の可能性に対する研究という新潮流の中に小田氏自身の研究を位置づける。その上で、従来の「社区研究」が持つ問題点を克服すべく、次の四点を方法論上の課題として挙げる。①従来の「社区研究」は社会学からのアプローチにほぼ限定されており、そのため構造や機能に関する静態的な分析に偏重していたのに対し、歴史学の立場から近代江南郷鎮社会の変容過程を動態的に考察すること。②従来の「社区研究」は分析範囲を個別の家庭や村落、市鎮など微視的な対象に限定する傾向があり、これら個別研究で得た結論を一般化するには、周辺の地域を含めた「中観」[5]的分析が必要であること。③郷鎮、村落、家庭など様々なレベルの「社区」が互いに連動する点に注意を払うこと。④従来の江南郷鎮史研究が資本主義の萌芽への関心から進められたこともあって明清期に集中しており、近代とりわけ民国期における郷鎮社会の変容過程は研究史上の空白であること。かかる課題や問題点を踏まえた上で、「伝統社会」から「近代社会」への指標を、産業構造の高度化、生産手段の機械化、空間構造の合理化、社会生活の文明化などに求める。ただし、中国や国内各地域の「近代化」への道は自然環境や歴史的条件によってそれぞれ独自の歩みにより多様な形態をとりうるという。ここでは特に独自の形態を示す江南の郷鎮社会を対象の「社区」とし、費孝通氏による「郷脚」の指摘を踏まえて、それを「市鎮を結節点とし、周辺の農村地域との間に織りなされる網状の領域」と定義づける。

第二章の「現代工業的成長」では、郷鎮社会における近代工業化の過程に関する分析、すなわち江南に無数に分布する「点」に対する考察が展開されている。分析に際して小田氏はまず「郷鎮工業」と「現代工業」（近代工業）という二つのカテゴリーを使用し、前者を近代江南郷鎮において叢生した、資本主義的性質を備えた民営工業と定義する。そして『資本論』に基づき、後者は生産手段と労働関係から工場制手工業から工場制機械工業への発展段階をたどるという。工場制手工業は一九世紀末より、資本主義的工業化の指標となる工場制機械工業については民国初から一九二〇年代末より発展が見られ

るとし、業種については、絹織物業が盛澤鎮などを有する蘇州府を中心とし、綿織物業が松江・蘇州府を中心とするという地域による分布偏差を明解にする。ただし「現代工業」への発展が確実に進行していたものの、商業資本を媒介とする家内手工業が絹織物業・綿織物業をはじめとする多様な業種において依然として少なからぬ比重を占め続けたことを指摘する。かかる郷村社会の工業化への動因を小田氏は複眼的に捉える。つまり、人口圧による貧困を回避するため個別農家の商業経営が高度に進行し、市鎮のネットワークが発達したという伝統的な動因は、「外力」によって従来の経済構造が瓦解した後も、工業化の基礎を提供しえたと捉えるのである。また、このような図式は、近代都市と農村部との関係に対する把握にも同様に見られ、郷鎮の工業化は上海に代表される近代都市の輻射とともに現地における資源を効率的に動員できるための歴史的土壌との、この両者が絡み合ったことで成し遂げられたという。

続いて第三章の「市場体系的発育」では考察対象を「面」、すなわち市鎮のネットワークに広げる。小田氏は中心地学説に依拠し、空間構造の角度から郷鎮の工業化の結果でありまた工業化を促す前提条件であるという双重関係にある郷鎮のネットワークの生成過程、生成法則、構造や機能を解明し、重層的で高い密度を誇る市鎮のネットワークの形成は単独の市鎮ではなしえない優られた経済機能を江南市場に具有せしめたことを明らかにする。次に小田氏は江南地方独自の条件に基づく発展を「郷鎮化」と称し、その指標として人口動態や市鎮のインフラ整備を挙げる。市鎮の数量や規模から農村人口が市鎮に流入する趨勢があったことを実証し、またそれと相関する市鎮のインフラ整備について消防、公衆衛生、電気、水道などの各事業を列挙する。さらに生産者と市場、伝統的な地方市場と資本主義市場を結びつける存在としての「商行」の存在に着目し、市場システムにおける結節点としての機能や位置を綢緞行、土布行、絲行、米行、桑行など主要各業種にわたって解説し、その積極的な役割を評価する。最後に江南市鎮ネットワークの市場システムとしての役割を補助する「社会化システム」について述べる。小田氏は「社会化システム」を交通、運輸、通信などの要素と金融や情報などの要素に分けて検討し、「社会化システム」が社会発展の助力になりうるものの、それは産業構造の発展に伴ってのみ有効になるという。

第二章と第三章が郷鎮社会の経済機能を中心にアプローチしているのに対し、第四章の「郷土生活的転型」では従来の市鎮研究では補足的に言及されるにとどまっていたいわゆる社会史の領域に対する考察が試みられている。まず郷鎮社会に成り立つ権力構造の変動について、政治への参与と政治意識の高まりが「文明度」の重要な側面を表す指標とした上で、清末地方自治期と一九二〇年代の市民公社における在地有力者の活動を検討し、彼らの公的な政治活動への参与や地方政治に与えた役割の意義を積極的に評価する。また、民間政治の場としての茶館の存在にも言及がされている。続いて余暇生活を社会生活の文明化の重要な尺度の一つとし、郷鎮社会の空間、時間、消費と密接な関係にある「廟会」をその具体的な素材として取り上げ、近代的な余暇生活が伝統的な余暇生活を基礎として発展したことを指摘する。また余暇生活における茶館の役割についても触れている。さらに陶行知による郷村教育運動が農民の素地向上に与えた役割を考察する。特にコミュニケーション論の角度から、郷村教育活動を進める組織や伝播者との接触の中で農民が自己を変容させていく過程を具体的に分析し、それが近代的農民の雛型を作り上げたと評価する。最後に民俗学的な関心から、服飾習慣や物質生活といった消費文化の特徴や女性解放などの「家庭革命」の過程を述べ、それらが江南郷鎮社会の近代化を反映したものだと指摘する。

三章にわたる緻密な実証を踏まえ、第五章の「結語」では江南郷鎮社会の発展の過程とそこにおける市鎮の役割を、①農村の工業化に対して作用した市鎮の空間的な合理性、②小農経営に対して市鎮市場が果たした商品化の推進力、③情報伝播の基地としての市鎮が郷鎮社会における近代的生活に与えた影響、④外界と郷鎮社会の結節点となり地域の近代化を進めていく新式知識人や鎮商で構成される指導者の立脚点としての位置、の四点にわたって総括する。以上のように江南郷鎮社会は発展に有利な諸条件を備えていたにもかかわらず、旧来の土地制度の矛盾、都市資本の二面的な影響、宗法制度のような伝統文化などにより真の発展が阻害されていたが、社会主義制度の成立を経て一一期三中全会に至り、地域の実情に符合した近代化の道を歩み出したと宣言する。そして最後に江南郷鎮社会という微視的・「中観」的観察の特殊性から中国全体の普遍性がどの程度引き出せるかという方法論の問題に対して、それぞれの「郷土」が歴史

的にもつ特色――「郷土本色」――を継承・利用して産業化を果たしていく過程として捉えることで、他の地域との比較・検討を進めることを今後の展望として提唱している。

三

小田氏の研究において印象的なのは、それが単に江南郷鎮史研究の空白部分であった近代における状況を掘り起こしただけにとどまらず、経済学、地理学、社会学、民俗学などの隣接分野の方法論を積極的に取り入れることで、先行研究が積み上げてきた諸成果をさらに高い段階に推し進め、江南郷鎮史研究に「深み」を与えていること、そして従来あまり顧みられなかった廟会、教育、民俗・生活といった領域に分析を進めることで研究に「広がり」を持たせていることである。第二章と第三章においてそれぞれ分析されている市鎮の工業化と市鎮のネットワークについていえば、劉石吉氏、樊樹志氏、陳学文氏の三氏の著書をはじめとする従来の研究はスキナーの市場圏理論を参照しつつも、あくまでも明清期を中心とする実証研究であった。また、これらの研究では主に市鎮の商業化に分析が集中しており、市鎮の工業化や地域市場が外部市場と出会ったことで受けた影響については付随的に言及にされるにすぎなかったことも事実である。小田氏はこれらの問題について、様々な史料を活用しつつ、隣接分野の分析概念を導入して研究をより高い次元で結実させている。小田氏の研究には論点が多く、本稿がそのすべてについて論究することはできないので、以下小田氏が著書全体を通じて目指したところの有効性という問題に焦点をしぼってその評価を述べたい。

中国の「近代化」の過程を分析する際、「衝撃」と「反応」、「近代」と「伝統」のように二元論的に捉えることで、「西洋の衝撃」が中国の停滞性を打破し、その発展への唯一の契機とする陥穽にはまるのを避けなければならないことは贅言を待たない。[6] 小田氏は複眼的な視点でこの問題に対処している。つまり郷村社会の工業化の動因となったのは、「西洋の衝撃」のみならず、人口圧による貧困を回避するため高度に発達した個別農家の商業経営や市鎮のネットワークという伝統的な要素であるとする点である。このような視点は上海を中心とする都市に近代工業が成長する過程の、都市と農村との関係（「工業区位」）に対する把握にも同様の図式が見られる。郷鎮の工業化は上海を中心とする近代都市の輻射とともに

に現地における資源の効率的な動員との両者が絡み合ったことで成し遂げられたと捉えられているように、「西洋の衝撃」にあう前にすでに高い成長を見せていた市鎮の商業化や市鎮ネットワークという「伝統性」は近代化への土壌となったと考えられているのである。

次に、小田氏の研究が江南郷鎮史研究に「広がり」を持たせ、今後の研究の可能性を示した「郷土生活」の部分について触れておきたい。氏は、権力構造の変容、郷村教育、余暇生活、民俗生活などいわゆる社会史の領域に属するテーマを、社会学、民俗学などの方法論を適用することで斬新に切り込んでいる。権力構造の変容と郷村教育については後述することにして、ここでは余暇生活と民俗生活について考えてみたい。必ずしも明示されているわけではないが、「廟会」「家庭革命」「改良風俗運動」といったテーマは江南郷鎮社会における近代化と空間、時間、ジェンダーとの関係の変化について示唆に富む内容を示している。小田氏は廟会を農民の余暇生活の典型として取り上げ、それが農民の生産サイクル、特に養蚕に関する「時」と密接に関係していたとする。廟会が開かれるのは市鎮であり、つとに「郷脚」と指摘されているような「空間」の存在を確認するものである。廟会からは江南郷鎮社会の「時空」がもつジェンダーのあり方も浮かび上がってくる。家内手工業によって家計を支えていた女性は日常生活において江南の「時空」の結節点である市鎮に来ることはほとんどなかったが、廟会の開催日は公然と市鎮に行くことが許される数少ない日であった。郷鎮社会の「近代」化はこのような、時間、空間、ジェンダーとの関係を変えつつあった。小田氏が指摘しているように、余暇としての廟会は映画など従来の郷鎮の「時」に縛られない新たな娯楽に取って代わられるようになった。また、新文化運動の影響を受け、新式知識人たちの間では「文明的」な家族・結婚のあり方が模索されたり、農村においても工場での労働により、経済的に自立した女性が現れたことで、家父長的家族のあり方が揺らぎだしたりするなど、ジェンダーのあり方についても変化が見られたのである。これらの問題は今後検討を重ねていく必要のある領域であろう。

第三に、小田氏の研究をさらに特徴づけているものは、精緻な実証や方法面での試行、新たな研究領域の開拓などを支える多彩な史料である。まず全般にわたって実証の骨格を構成しているのが郷鎮志を中心とする地方志である。地方志は従来より中国地域史研究の中心史料であ

るが、小田氏の研究の特徴は清末や民国期の郷鎮志や県志に加えて、一九八〇年代に入り中国各地で編纂が始まった新編地方志を全面的に活用している点にある。概して新編地方志は、郷・鎮レベルにおいて行われた調査をもとに県志が編集されるという手続きを経て、九〇年代に入り陸続と出版された。郷鎮志については内部資料として油印本が関係者に配布されるに止まった地域が多いようであるが、江南地方においては豊かな経済力や強い郷土意識を背景に、『盛澤鎮志』（南京、江蘇古籍出版社、一九九一年）や『南潯鎮志』（上海、上海科学技術文献出版社、一九九五年）のような有用な新編郷鎮志が数多く出版されており、小田氏の分析に供している。

また文史資料もミクロな地域に関する貴重な情報源である。文史資料は地方志編纂と表裏の存在であるが、新編地方志には必ずしも取り上げられなかったり、取り上げられたとしても簡潔であったりした、人物、風俗、掌故に関する情報を比較的詳細に収録している。文史資料には古老の体験談や人物・事件に関する回想録なども多数収録されており、このような記事は聴き取り調査に準ずる史料的価値を有するものであり、特に民国期以降の状況に関しては、文献史料を補足する有用性もある。小田氏の研究全体を通して文史資料が活用されている。

さらに近年、清代以降の研究では、大陸・台湾における所蔵機関が広く対外的に開放されるようになったのに伴い、檔案は研究に不可欠な主要史料の座を占めるようになっている。これまで広く知られている州県レベルの地方檔案は、巴県檔案、太湖庁檔案、淡新檔案などの数例を数えるのみである。ところが、小田氏は、呉江市（旧呉江県）檔案館に所蔵されている清末以降の檔案の内、『清末戸口調査資料』を使用し、戸口調査をめぐって発生した有力者の対立を検討することで、地方政治構造の変容過程の態様に迫っている。なお、当檔案館には小田氏が使用していない清末の地方自治関連檔案や民国期、とりわけ国民政府期以降の檔案も豊富に所蔵されており、今後これらを利用した地域史研究にも期待が高まるところである。(7)

新聞も近現代史の史料として独自の地位を占めている。一次史料としての新聞それ自体はさほど珍しいものではない。『申報』や『大公報』など大都市で出版された、いわば「全国紙」ともいうべきものや清末留日学生を中心に東京で発行された、革命派や改良派の新聞は早くより注目されてきた。しかし、県以下の地域社会に即して

新聞出版活動や世論の動向に着目した研究はまだあまり多くない。小田氏が実証の組み立てに利用する『新黎里』や『新盛澤』などの新聞は、新文化運動の影響を受けて一九二〇年代に柳亜子が中心となり呉江県下の各市鎮で発行されたものであり、これらの問題に対しても好個の史料たりうると思われる。

このように、日本国内はいうまでもなく、中国国内においても他の地域では入手不可能な多種多様な史料群を精力的に蒐集したことによって、従来困難であった民国期以降の情況の追跡や方法論上や新たな研究領域への試みの可能性が生まれたばかりでなく、史料の多様性自体も本書の多面的な分析の特徴を際だたせているように思われる。

以上、小田氏は江南地域史研究の空白部分であった近代における状況を実証しただけに止まらず、先行研究が積み上げてきた諸成果をさらに高い段階に推し進め、江南地域史研究に「深み」を与えている。また、経済面に比べて、従来あまり研究蓄積のなかった廟会、教育、民俗・生活といった領域に分析を進めることで今後の研究の可能性に「広がり」を持たしめていることもその特徴として挙げられる。そしてこれらの試みを支えているのが、清代から新編に至る郷鎮志、文史資料、地方檔案、新聞などの多彩な現地史料である。これらの多くは県レベルあるいは郷鎮レベルで出版されたり、所蔵されたりしている史料であり、小田氏によってはじめて本格的な分析に用いられたものも少なくない。地域史研究におけるこのような現地史料の活用も小田氏が示した今後の研究における可能性のひとつである。

四

次に小田氏の研究が有する問題点をいくつか挙げてみたい。とりわけ、第四章「郷土生活」で取り上げた権力構造の変容と郷村教育については、①様々な政治主体の性格や近代教育導入の歴史やその担い手について必ずしも全面的な議論がなされているわけではない、②多彩な史料を使用しているにもかかわらず、個々の史料が成り立つ構造にあまり目を配っていないことでその有用性を完全には利用仕切れていない、という点について問題がないとはいえない。以下、これらについて詳しく検討する。

まず、清末の地方自治制施行期における権力構造の変容について、小田氏は、呉江県盛澤区において戸口調査

が行われた際、有権者の定義について行政当局、籌備自治公所や有力者の間でやりとりされた文書を手がかりに権力構造の変容の実態を復元している。[8] 当時の有権者の資格は正税の納入額の多寡によって決められていたが、そこで議論となったのは釐金が正税に含まれるのか否かであった。城鎮郷レベルにおける自治の施行にあたって頒布された『城鎮郷地方自治章程』では釐金は間接税であり、正税ではないと明示されていたが、民政部が湖南巡撫に宛てた電文では正税と見なすという解釈も出ていた。江南でも屈指の大鎮である盛澤鎮では富裕な商工業者層が有力な政治主体の中心を担っており、選挙権を求めて釐金の解釈の変更について行政当局、籌備自治公所に上申したが、結局認められなかったというのがその経緯である。しかしながら、この「釐金案」を素材とした氏の分析からは県以下のレベルについての政治構造の変容について全貌が必ずしも伝わってくるわけではない。それには次のような問題があるように思われる。一つは、商工業者層を含めた有力者層の活動内容やその時代的な位置づけが前後の状況を踏まえた上でなされていない点である。太平天国以降、地域社会の諸事業を担った有力者層やエリート層の動向は特に欧米や日本の学界において地域社会の権力構造を考察する上で中心的なテーマである。[9] この分野における先行研究と小田氏の分析とがどのように関連づけられるのかについてはやや曖昧さが残るところである。二つは、地方有力者層がどのような政治観に基づいて地方公共事業を運営していたのか、そしてその運営原理は地方自治期以降における公的な政治にどのように反映されたのか、その原理と官権力とはどのような関係であったのかなどについては更なる検討が必要であるという点である。

同様に、有力者層の動向に対してあまり注意が払われていないことは地域社会における近代教育の導入の歴史やその担い手の位置づけを曖昧にしてしまっているように思われる。小田氏は郷鎮社会における教育活動として陶行知の郷村教育運動を取り上げている。しかしながら、陶行知が郷村教育運動を展開したのは一九二〇年代後半から三〇年代にかけてであり、その活動が、二〇世紀に入ってからの教育改革や学堂創設という教育史上の流れにどのように位置づけられるかについては十分に明らかにされていないように思われる。近代教育の導入や学堂創設を推進した在地の有力者や知識による教育活動を踏まえた上で、陶行知による郷村教育運動が従来の教育活

動とどのような関係にあったのかという問題について検討を加える必要があろう。

次に、史料操作の問題について述べたい。「釐金案」に関する分析では呉江県檔案が使用されている。県レベルの地方檔案の利用はさほど多くなく、呉江県の清末地方自治に関する檔案を利用した研究が非常に貴重なものであることは先に言及した。しかし、檔案といえども万能の史料ではない。檔案は史料として圧倒的な信憑性を持つが、それが成り立っている構造や文書がやりとりされた背景に対する検討を疎かにすると、事象全体への結びつきを必ずしも示されないまま個別的な事象にのめり込みすぎてしまう危険がある。小田氏の分析が地方自治の全貌と必ずしも有機的に結びつかない一因にはこのような史料操作上の問題が存在しているように思われる。

同様に、小田氏がしばしば使用している、『新黎里』や『新盛澤』など一九二〇年代の新聞史料も、その成立の背景について十分な解説がなされていないため、それを史料として必ずしも生かし切れていない部分も存在している。地域社会と新聞出版事業との関係はいまだ十分検討がなされていない領域であるので、記事を史料として有効に運用するためにはこのような新聞を誰がどのような目的で出版したのかを吟味する事は不可欠な作業であろう。どのような勢力を背景にこれらの新聞が出版されたのか。この点については小田氏は、それが新式知識人や彼らが結成した政治・教育団体、市民公社、そして商会に代表される実業家や商工業者層であったと言及している。出版者の背景やその意図を確認した上でさらに必要なのは、執筆者がどのような意図で記事を執筆したのかについての検討である。このような執筆者のまなざしへの配慮によって、新聞史料によってただ単に事実を確定するだけとどまらず、歴史事象を立体的に浮かびあがらせることができるように思われる。

五

前節では、小田氏の研究のうち権力構造の変容と郷村教育に関する分析に対して二つの点から疑問を挙げ、かつ問題提起を行った。本節では、有力者の政治参加と地方政治構造の変容や地域社会における近代教育の導入に関する日本の最近の研究を参照し、筆者自身が今後どのような方向でこれらの課題を検討すべきかを考察し、今後の近代江南地域史研究の見通しを立てたい。

まず、有力者の政治参加と地方政治構造の変容につい

て最近の研究を整理してみよう。この分野における近年の最大の成果は夫馬進氏の善会・善堂研究に関する大著である。夫馬氏は、その起源が明末まで遡る有力者層による慈善団体である善会・善堂が松江府下においてネットワークを張り巡らし、その下部組織は市鎮に至っていたことを明らかにしている。[10] これは江南郷鎮社会の社会統合において有力者が果たす役割の大きさについての証左となっている。また、善堂の会計報告である徴信録に基づき、有力者による慈善事業が、「オフィシャル」な原理とは異なる「パブリック」な原理に基づいていたことを示し、その原理が近代的な自治の原理と接合したのではないかという示唆に富む見通しをたてている。[11]

有力者層によって運営された事業が独自の原理や領域を持つものであるという視角は稲田清一氏の一連の研究にも共有されている。[12] 稲田氏に拠れば、江南においては一九世紀以来、市鎮在住の下層知識人層や商人層が「鎮董」として、官権力の遂行し得ない郷鎮社会の諸事業を担うという「鎮董制」が存在しており、「鎮董」には彼らが担った「地方公事」が「官治」とは一線を画する独自の領域として意識されていたという。そして、この「鎮董」層が地方自治期に政治参加する主体となったと見通している。このような「鎮董」層の特徴は郷鎮志の編者の地域社会観・秩序観に着目した森正夫氏の研究においても確認できる。[13]

夫馬氏と稲田氏の研究にはともに地方自治制下における政治主体の性格という問題がその視野におさめされているが、地方自治制に進出した有力者層や地方自治制の導入が地域社会に与えた影響などについては、田中比呂志氏と黄東欄氏の両氏が上海近郊の地域に即して実証研究を行ない、江南地域社会における地方自治の実態解明の足がかりを築きつつある。[14] しかし、両氏の研究は主に県レベルの政治構造に主眼が置かれており、郷鎮社会における政治構造の変容や郷鎮社会を担った有力者層の位置づけについては未検討の部分がないわけではない。清代後期の成果を参照しつつ、郷鎮社会の有力者層の言動の背景や意図を読み解くことで、県より下の郷鎮社会や村落社会の政治や、それらと県レベルの政治との間の重層的な政治構造を解明していくことは今後の課題として残されている。[15]

次に、二〇世紀初頭の地域社会における近代教育の導入の歴史やその担い手の位置づけについて考えてみたい。近代教育については、学校制度の成立過程の実態を基礎

研究した阿部洋氏の実証研究があるが、[16]近年地域の側から近代教育導入の過程を捉える研究が現れている。特に高田幸男氏は無錫の教育界に即して、清末の教育制度改革において学堂創設や教育行政機構の運営を実際に支えた地方有力者に焦点をあて、その特徴の一端を明らかにしている。高田氏は清末無錫の教育行政機構の形成過程とそこに結集する有力者層を分析し、当該時期における有力者層と教育活動との関係を彼らの地方行政への進出という形で促える。そして、地域における近代教育の導入を推進した「教育界エリート」層が形成され、彼らが構成した教育会や勧学所が自治機関的色彩を強く帯びていくことを指摘している。[17]これらから明らかなのは、清末以降の地域社会における教育の問題が先に取り上げた地方政治構造の変容に関する問題と不可分であるということであり、総体的な理解を得るためには地方政治と教育という二つのテーマが互いを視野に入れなければならないということである。さらに高田氏が無錫教育会の役員構成を詳細に分析し、「教育界エリート」層が国民革命期を境に紳士集団から専門的な教職員集団へと変質したことを指摘しているのは示唆的である。[18]今後は、このような近代教育の担い手の性格が変容したにもかかわらず、継承されたり、共有されたりした発想が何であるのかも解明される必要があるだろう。

ところで、地域社会における近代教育の導入についても、郷鎮社会におけるそれは未だ十分に解明されたとは言い難く、とりあえず今後個別事例を積み重ねていく必要があろう。この点については興味深い指摘がある。鈴木智夫氏は『申報』の記事を素材に、清末無錫において教育経費の分配をめぐり城自治区のエリートと郷自治区のエリートとの間で発生した対立を分析している。[19]この城郷関係ともいうべき対立軸の一方にある郷自治区の有力者の権利意識については稲田氏による指摘とも重なる点が多く、研究の深化が望まれる所である。

以上、最近の日本の研究の概要とその課題をいくつか明らかにしたが、それではこれらを踏まえて筆者自身がどのような研究を行ってきたか、また今後どのように展開していくのかについて若干の見通しを述べたい。まずは権力構造の変容の位置づけについて、続いて郷村教育の系譜について述べ、最後に研究を支える史料操作について付言し、今後の近代江南地域史研究の方向との関わりについて論じたい。

第一に、地方自治期以降における有力者の公的な政治

舞台における活動や彼らの官権力との関係の変容を明らかにするには、少なくとも一九世紀には有力者が在地事業をインフォーマルな形で担う、ある一定の質的・空間的領域が形成されていたという指摘を踏まえる必要がある。質的領域については、例えば、政治領域は「官治」と「民治」（あるいは「自治」）とが一線を画し、後者の領域を自らが担っているという意識が当時の有力者にはあったことが地方志をはじめ当時の文献においてしばしば見出せる。これについては前述したように、有力者による「パブリック」な原理と「オフィシャル」な原理との対抗関係という興味深い指摘が夫馬氏によってなされている。[18] 空間的領域については、郷鎮社会の有力者によって担われた事業の管轄区域に着目した稲田氏の指摘が示すように、郷鎮社会という空間は「パブリック」な原理の原基であった。今後この政治空間の実態解明を進め、さらに様々な政治空間が互いにどのような影響を及ぼしていたかを明らかにしていく必要があると思われる。

筆者もこのような動向を踏まえ、特に清末民初の郷鎮社会を担った一有力者の言動に注目し、地方自治制によって郷鎮社会は行政の最末端として制度化されたが、彼はそれを「民治」の独自の領域として見なし、「地域」の権益擁護に一貫して努めた事実を明らかにした。[20] ここでは地方財政をめぐる有力者や官権力の動向に対して基本的な視角が得られたが、十分に踏み込んだ分析は出来なかった。しかし、筆者は最近、江蘇省嘉定県において清末より一〇年あまりにわたって出版された地方紙を発見し、これを使用して徴税機構改革をめぐる有力者層の活動を分析し、今後の見通しについて簡単な知見を得ることが出来た。[21] 嘉定県の事例に拠れば、地方自治機構へ進出した有力者層は、従来の財政構造を克服し近代的な財政制度の確立を意図する派閥と胥吏による旧来の請け負い的な徴税制度を擁護する派閥、すなわち「パブリック」な原理を規範とする集団と「オフィシャル」な原理を規範とする集団とに分化し、彼らが激しく対立したことが民初の地方政治を特徴づけることになった。[22] またかかる対立の軸の一つには県権力へのアクセスが容易な城自治区の有力者と郷鎮社会を政治的源泉の一つとする郷自治区の有力者という構図も見え隠れする。地方政治構造の重層性に着目しつつ、個々に発生した事件を全体の中に織り込んでいく作業が今後必要であると思われる。

次に有力者による教育活動に関する見通しについて述べよう。筆者は先に、上海県陳行郷の有力者たちが編纂

した『陳行郷土志』という郷土教育の教科書を素材に清末から五四運動前後までにおける有力者の多岐にわたる教育活動を考察したことがある。[23] ここからは特に一九二〇年代以前において在地社会の教育を担ったのは、儒教の知識を基礎としながらも改良思想を大幅に取り込んだ「紳士」としての色彩が強い知識人であったことが確認された。そして、自らも学堂において教鞭を執った孔祥百という人物は、『陳行郷土志』の序の中で彼らの在地における教育活動の目的や教育観について次のような興味深い内容を示している。[24]

愛国を空しく談ずる志士は各国の書に通暁し一世を風靡しているが、郷土の掌故を一二質問されても瞠目して答えることができない。……郷土を識らずしてどうして郷土を愛することができようか。郷土を愛することなくしてどうして国を愛することができようか。海外各国の児童の愛国精神は、郷土の歴史、地理、風俗、物産を早くから唱歌、舞踏、恩物の中に宿らせ、その美感を発揚し、その信仰を固めているからなのである。児童の心の中に公共の郷土を植付け、それぞれ固有の郷土の基礎を固めさせる。しかる後に県に推し進めれば、県の歴史、地理、風俗、物産は皆の知る所、愛する所になろう。同様に省、国に推し進めれば、省や国の歴史、地理、風俗、物産は、皆の知る所、愛する所になろう。

全体秩序を支える愛国心を高めていくことが究極的な目標として設定されていることから、これが書かれた一九二〇年には在地社会においても五四運動の影響を受けてナショナリズムが高揚したことが十分にうかがえる。しかし孔祥百は、外国の借り物の空理空論を振り回す議論が現実的には愛国心の涵養にはあまり寄与しないと退け、児童に「郷土」に対する公共心を植え付けることで「郷土」という実体的な秩序の基底を確保し、そこから県、省、国へと秩序の枠を押し広げていって全体秩序を回復するという実際的な方法を提示しているのである。この言説の背景には孔祥百をはじめとする『陳行郷土志』の著者たちが清末以来陳行郷において推進してきた近代教育の導入や普及の歴史、伝統的知識人としての顔、また稲田氏や森氏が指摘しているように、清代より郷鎮社会の公事を担ってきた指導者としてのアジェンダなどがあり、これは清末民初において郷鎮社会を担った有力者層の特徴を如実に表現している。『陳行郷土志』は、「紳士」的な側面が濃厚な在地有力者による、清末から

一九二〇年代にかけての教育活動の特徴を示す一例にすぎず、とりあえずさらに個別事例を積み上げていく必要があろう。在地の人間によるかかる「内発的」な教育活動と比較することによって、陶行知に代表されるような近代的知識人による郷村教育運動が従来の有力者による教育活動によって一定程度整備された土壌をどの程度継承し、また従来の教育の何を克服しようとしたのか、という教育史上での位置づけがはじめて可能になると思われる。

最後に、史料操作の問題について小田氏が論証の骨子に利用した地方紙『新盛澤』の記事を例に考えてみたい。『新盛澤』は市鎮レベルで発行された地方紙という事実だけでも興味深い史料であるが、それに加えて、『新盛澤』の発行者は柳亜子が新文化運動の影響を受けて結成した文学結社・新南社のメンバーの一人であったことから、新文化運動の地域社会に対する影響などについて、様々な分析の可能性を秘めた史料であると言える。従って事実を確認するだけに『新盛澤』を利用するのにとどまらず、どのような意図で記事を執筆したのかという執筆者のまなざしを考慮することで史料の有用性がさらに引き出せるし、地域史を立体的に把握することが可能になると思われる。例えば、「綢領頭」という仲介業者の活動の論証として金寿聖「盛澤絲綢亟宜改良之管見」（『新盛澤』一九二五年八月一日）という記事が使用されている。この記事は民国期に入り勢力を増していた「綢領頭」に対してある方面から起こった非難に反論し、「綢領頭」が業界で果たしている積極的意義を高く評価し、それを製品改良の担い手として位置づけている。小田氏が仲介業者の機能を論証するためにこの記事を引用したことは正しいとしても、なぜ「綢領頭」のような伝統的勢力を評価して記事を執筆したのかという執筆者の視点に対する検討がなされれば、一九二〇年代の呉江県の在地社会においてどのような勢力が『新盛澤』の世論を支えていたのか、また地域からの秩序が模索されていた当時にあって、執筆者が「綢領頭」を基底秩序を支える「団体」として見なしていたのかなどの問題について別の読み方が可能になるように思われる。また同様の問題として興味深いのは彼らの廟会観である。一九二〇年代には呉江県の在地社会においても新文化運動の影響が強く現れていたことが、女性、家庭、結婚に関する記事から知られるが、当時の知識人の目標に「改良風俗」が挙げられる。廟会における消費やそこで暗躍する無頼の

存在などについてはその存在が明代に見出せるが、特に新文化運動後には中国の発展を妨げる要素として理解されるのが一般的であった。『新盛澤』においても廟会を迷信行為としてや浪費行為として捉える記事が掲載されているが、新南社の社員であった徐蔚南は迎神賽会における迷信的な要素を認めつつも、その民間芸能としての価値を大きく肯定している（徐蔚南「我之賽会観」『新盛澤』一九二五年九月一日）。このような言説からは在地知識人の改良運動の中において「風俗」が改良の対象であると同時に保存する価値を持つものとして見なされていたこと、つまり伝統的な要素と近代的な要素とが絡み合っていたことが読み取れるのである。

『新盛澤』に即して史料操作のあり方について述べた。近年の近代史研究においては各種の檔案をはじめとして様々な史料が発掘され、百花繚乱の様相を呈している。ただし、このような状況にあるからこそ、特に新たに開拓された史料の場合、それが成り立つ構造を十分に吟味する必要性がますます高まっている。逆にそうすることで史料に即して様々な問題を引き出すことも可能になると思われる。

以上、有力者の政治参加と地方政治構造の変容と近代教育の導入と地域社会に関する日本の最近の研究や筆者自身の研究を振り返り、今後どのような方向で近代江南地域史研究を進めていくべきかについての見通しを立てた。これらのテーマにおいては特に在地有力者層の動向を中心とした実証研究が蓄積されつつあるが、重層的な政治構造のうち、郷鎮社会における政治の実態については依然として様々な検討の余地がある。また、村落レベルの基層社会まで視野に含めて政治構造の重層性を解明しようとする試みについては濱島敦俊氏の研究を除けば体系だったものは少ない。更に小田氏も論及する民俗生活に関する研究領域では、風俗、ジェンダー、芸能、宗教などのテーマについても歴史学の立場からの分析は絶対量において寥々たるものであり、隣接分野の成果を参照しつつ検討を進めてくことが急務である。総じて、これらの領域において研究の「深み」を持たせていくことが目下我々の課題であることは間違いないだろう。

六

本書で使用されている多彩な史料には、小田氏自身が江南の数十に及ぶ市鎮を訪問して蒐集したものが多く含まれている。新編郷鎮志を例に挙げても、一般の市場に

流通する郷鎮志は全体からすれば絶対的に少なく、また県志の参考に供されたのみで油印本や稿本として内部保管されているものがかなりある。これらは現地の所蔵機関や編纂委員会に直接出向いていく以外に閲覧・蒐集する道はない。だが、ほとんど閲覧が許されず空しく帰途につくこともあるし、それとは反対に閲覧や複写に全面的に応じてくれるばかりか関係者から懇切丁寧なアドバイスや助力を得て研究に多大な刺激をもたらす場合もあり、順調に史料が集められるか否かは蓋を開けてみなければわからない。また何よりも、年々交通事情が改善されてきてはいるものの、中国で最も豊かな農村地帯である江南地方でも移動は容易ならざるものがある。小田氏の研究は、このような訪問を全くの個人研究の形で幾度となく繰り返す過程の中から紡ぎ出された成果である。筆者も一九九三年の上海留学以来、やはり個人の形で数度にわたって江南各県の所蔵機関やいくつかの市鎮を訪問して近現代の在地社会に関する史料を蒐集して来ており、小田氏が体験した苦労が身に染みて理解できるし、その飽くなき探求心には頭が下がる思いである。様々な点において不確定な要素がつきまとう現地訪問であるが、期待した結果が得られるか否かにかかわらず、バスに揺られながら眺める農村の眺望、市鎮の街並み、居住民の生活風景を体感することや、予期せずして得られた現地の方々との様々な交流は、現地に対する理解を助けてくれるし、その地を知ることで得られた実感は何ものにも代え難い探求の原動力となる。

〝発展〟の「モデル地域」として江南地方を据えることがあまり意味のないことは既に明らかであるが、文献による実証研究においても現地調査においても厚い蓄積を誇る江南地域史研究の成果は依然として地域史研究の「モデル地域」たりえているように思われる。しかし、このことは江南地方が排他的に「モデル地域」の地位を独占することを意味するわけではない。それは、各研究者が対象とする地域の多様な相貌を実証・復元し、それに基づいて各々にとっての「モデル地域」のイメージを同時並行的に膨らませていくことの方法論を示すものなのである。その上で、それぞれが自分の「モデル地域」を基準として他の地域を照射したり、地域像を持ち寄ったりすることによって各地域の多面的な比較研究を積み重ねていけば、地域史研究がより高い次元での議論に歩みを進めていけると確信する。

註

(1) 江南市鎮研究については、森正夫編『江南デルタ市鎮研究――歴史学と地理学からの接近――』名古屋大学出版会、一九九二年、所収の「市鎮研究文献目録稿」及び陳長剛「明清江南社会経済史回顧（一九九一――一九九七）」『中国史研究動態』第二四七期、一九九九年、参照。

(2) なお、日本人研究者による専著として、川勝守『明清江南市鎮社会史研究――空間と社会形成の歴史学――』汲古書院、一九九九年、が出版されている。

(3) 本書の紹介には『広島東洋史学報』第三号、一九九八年、に掲載された王衛平氏・施暉氏による書評がある。

(4) 「社区研究」あるいは「社区」というタームは近年中国の社会史研究において多用されているが、小田氏は家族や村落を含括した「地域社会」という意味で用いているように思われる。

(5) 「中観」とはマクロ（宏観）とミクロ（微観）との中間という意味で用いられている。

(6) P・A・コーエン著、佐藤慎一訳『知の帝国主義――オリエンタリズムと中国像――』平凡社、一九八八年、参照。

(7) 筆者は一九九九年三月、呉江市檔案局内にある呉江市檔案館を訪問し、檔案の閲覧を申請した。閲覧が許されたのは『清末戸口調査資料』の抄本二冊のみであったが、閲覧の際に通された閲覧室にはカード目録が設置されており、そこには清末の地方自治関連檔案以外に、民国期、とりわけ国民政府期以降の檔案が豊富に所蔵されていることが確認された。なお、調査にあたっては、蘇州大学社会学院の呉建華氏と復旦大学中国歴史地理研究所の侯楊方氏のご助力を賜った。記して謝意を表したい。

(8) 郷鎮社会の政治構造の変容については、後に小田「清末民初江南郷鎮社会的権力結構変動」『歴史檔案』七〇期、一九九八年、として発表されている。

(9) 欧米のエリート研究の一つの到達点が、Joseph W. Esherick and Mary Backus Rankin eds., *Chinese Local Elites and Patterns of Dominance*. University of California Press, 1990. である。また近年の地方エリートに関する研究動向については、岸本美緒「明清時代の郷紳」、『シリーズ世界史への問い』第七巻、岩波書店、一九九〇年、所収、同「明清期の社会組織と社会変容」社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』有斐閣、一九九二年、所収、参照。

(10) 夫馬進『中国善会善堂史研究』同朋舎出版、一九九七年。

(11) 夫馬前掲書、八一三―三七頁。

(12) 稲田清一「清末江南の鎮董について――松江府・太倉州を中心として――」森前掲書所収、同「清代江南における救荒と市鎮――宝山県・嘉定県の『廠』をめぐって――」『甲南大学紀要』文学編八六号、一九九三年、同「清末、江南における『地方公事』と鎮董」『甲南大学紀要』文学編一〇九号、一九九九年。

(13) 森正夫「清代江南デルタの郷鎮志と地域社会」『東洋史研究』五八巻二号、一九九九年。

(14) 田中比呂志「清末民初における地方政治構造とその変化――江蘇省寶山県における地方エリートの活動――」『史学雑誌』一〇四編三号、一九九五年、黄東蘭「清末地方自治制度の導入と地域社会の対応――江蘇省川沙県の自治風潮を中心に――」『史学雑誌』一〇七編一一号、一九九八年。

(15) 地方政治の分析には、政治空間の重層性に十分留意しなければならない。濱島敦俊「農村社会――覚書」『明清時代史の基本問題』〈中国史学の基本問題シリーズ四〉汲古書院、一九九七年、所収、参照。

(16) 阿部洋『中国近代学校史研究――清末における近代学校制度の成立過程――』福村出版、一九九三年。

(17) 高田幸男「清末地域社会と近代教育の導入――無錫における『教育界』の形成――」神田信夫先生古稀記念論集『清朝と東アジア』山川出版社、一九九二年、所収、同「清末地域社会における教育行政機構の形成――蘇・浙・皖三省各庁州県の状況――」『東洋学報』七五巻一・二号、一九九三年。

(18) 高田幸男「近代中国地域社会と教育会――無錫教育会の役員構成分析を中心に――」『駿台史学』九一号、一九九四年。

(19) 鈴木智夫「清末無錫における教育改革の展開と地域エリート層」森正夫編『旧中国における地域社会の特質』科学研究費成果報告書、一九九四年所収。

(20) 佐藤仁史「清末・民国初期における一在地有力者と地方政治――上海県の《郷土史料》に即して――」『東洋学報』八〇巻二号、一九九八年。

(21) 佐藤仁史「二〇世紀初頭の中国における地方政治と言論―江蘇省嘉定県の地方紙『曏報』に即した初歩的分析―」（富士ゼロックス小林節太郎記念基金小林フェローシップ一九九八年度研究助成論文）富士ゼロックス小林節太郎記念基金、一九九九年。

(22) 一九九九年九月と一〇月に東京大学東洋文化研究所で開催された契約文書研究会例会における筆者の口頭発表「清末民初における徴税機構改革と地方政治構造の変容――江蘇省嘉定県の夫束問題をめぐって――」。

(23) 佐藤仁史「清末・民国初期上海県農村部における在地有力者と郷土教育――『陳行郷土志』とその背景――」『史学雑誌』一〇八編一二号、一九九九年。

(24) 沈頌平編『陳行郷土志』一九二一年石印本、上海図書館古籍部蔵。